FOCUS

野良 IT のすすめ

麗澤大学 工学部 教授　宗健

「シャドーIT」という言葉をご存じだろうか。あまり知られていない用語だが、狭義には「企業・組織側が把握せずに従業員または部門が業務に利用しているデバイスやクラウドサービスなどの情報技術（IT）のこと」を指し、広義には「従業員が自作した Excel などのマクロや VBA 等を使った業務システム」のことも含むようで、「野良 IT」とも呼ばれているようだ。

本稿では、狭義、広義の定義を区別するためクラウドサービスやソフトウェアを勝手に導入することをシャドーIT、Excel などのマクロを使った自作システムのことを野良 IT と呼ぶ。

シャドーIT は危険なのか

情報システム部門が許可していない個人の PC を持ち込んだり、支給されている PC に勝手にソフトをインストールしたり、勝手にファイル送信システムなどのクラウドサービスを導入することは、セキュリティの観点で管理されているとは言えず安全とは限らない。

そのためセキュリティに厳しい組織では、支給した PC の USB が機能しないように設定したり、ソフトウェアのインストールをできないようにしている場合も多い。

一方で、大学やスタートアップ企業のように、BYOD（Bring Your Own Device）を認めていて、個人所有の PC を業務利用できる場合も多い。

BYOD の場合は、持ち込んだ PC にどんなソフトがインストールされているか、どんなクラウドサービスを使っているかを管理することは難しい。こうして考えると、実態として狭義のシャドーIT が必ずしも危険とは言い切れないだろう。

実際、株式会社アシュアードが 2024 年2月に発表した調査結果では、シャドーIT にさまざまな課題を感じつつも「従業員 1000 名以上の企業の6割がシャドーIT 対策未実施」となっている。

多くの企業で対策されていないということは、シャドーIT は実際は事実上の黙認状態であるとも言えるだろう。

それは、管理する側から見ても、全ての IT サービスの管理をするだけのパワーはないが、業務効率化につながるクラウドサービスやソフトウェアは多数あることは分かっているからだろう。それでも、対策されていないとしてもルール上はシャドーIT を規制していることがほとんどだろうから、勝手にやらないほうがいいとは思う。

野良 IT は止められない

とはいえ、従業員 1000 人以上の企業の4割はシャドーIT 対策を実施しており、情報システム部門の許可がなければ、新たなクラウドサービスもソフトウェアの導入もできない、ということになる。

しかし、ほとんどの企業には Microsoft の Office365 が導入されており、Office365 に含まれている Excel、Word、PowerPoint と Access を使えば、相当の範囲の業務の自動化（システム化）ができる。

こうした野良 IT はプラグラミング言語の一種である Excel の VBA やマクロを使ってつくられていることが多いが、VBA プログラミングを覚えるのにはそれなりの時間がかかっていたので、野良 IT は限定的な存在だった。

しかし、論理的な思考能力を持ち、作業手順をアルゴリズムとして考えることができれば、プログラミング自体は chatGPT のような生成系 AI が書いてくれるようになったため、野良 IT はずいぶんつくりやすくなった。

おそらくここから数年でいろんなところで野良 IT が増殖していくだろう。

野良 IT のメリットとデメリット

情報システム部門が把握していない従業員が自作した野良 IT は、管理部門からは嫌われている。

嫌われる主な理由は、「つくった人がいなくなったら、メンテナンスできなくなる」というものだが、それは管理側のエゴというものだろう。つくった側からすれば、ルールの範囲内で自分の業務の効率化をはかっただけなのだから。

そして、異動や退職で野良 IT を引き継いだ場合に問題が起きる根本原因は、引き継いだ側のスキル不足にある。それを理由に野良 IT を非難するのは、組織の能力向上を妨げるだけだろう。

少々極端な例だが、1990 年頃にパソコンが職場に導入されはじめた頃、出はじめたばかりの表計算ソフトの Microsoft Multiplan（マルチプラン）を使った若手社員が「そんなものを使ったら引き継ぎができないじゃないか！」とベテラン社員に怒られた話を思い出す。

昔は、表計算ソフトを使うことが、今の野良 IT のようなものだったが、今では誰もが使っている。

今、野良 IT と非難されている VBA やマクロもいずれは当たり前のスキルになるはずだ。

野良 IT は組織能力を表す

野良 IT は二つの意味で組織能力を表す。

一つ目は組織メンバーの能力の高さだ。当然だが野良 IT をつくるには、それなりの知識・スキル、経験と能力が必要だ。

例えば営業事務のメンバーが、営業所からの売り上げデータを Excel ファイルで集め、それを自動的に集計してレポートを出力する野良 IT を Excel の VBA でつくれ、異動したときに引き継ぐメンバーにもそうした能力が備わっているとすれば組織の能力は相当高いことになる。

逆説的に言えば、野良 IT をなんとかしなければ、という問題意識が情報システム側にあるとすれば、現場の IT スキルが相当高い、ということなのだから、規制するよりもその能力を活かす方法を考えた方がいい、ということになる。

二つ目の側面は組織風土の問題だ。

野良 IT を厳しく規制するような管理統制の厳しい組織は、風土や人間関係が硬直的であることが多い。そうした組織では野良 IT に取り組むことは当然なく、そうした能力を伸ばす土壌は生まれない。

一方、情報システム部門が「仕方ねえよな、まったく」とか言いながらも、野良 IT とうまく付き合っているような組織は、風土や人間関係が柔軟で、イノベーションも生まれやすい。

当然、一人一人のメンバーも自分ができそうなことを新たに取り組むので、それぞれの能力が向上し、経験も蓄積されていく。

そうした意味では野良 IT は組織風土を背景とした結果と言えるだろう。だから、ある意味野良 IT はオススメなのだ。